

# FICoN第8回ウェブ検討会 (R5.11.28)

## ○「拡がる建築用途への地域材利用 —北海道での取組事例—」

### <講演>

「地域材総合利用を目指して」 株式会社ハルキ 春木 真一氏

「カラマツの建築材利用を拡大する」 有限会社瀬上製材所 瀬上 陽平氏

「道産材の使用比率を上げるために」 株式会社ニッショウ 松原 章氏

「2×4パネル工場における道産材の利用」 西條産業株式会社 神谷 純司氏

「道内素材生産の動向と今後の戦略私案」 北海道木材産業協同組合連合会 内田 敏博氏

### <総合討論>

(司会) 北海道立総合研究機構 古俣 寛隆氏

(パネリスト) 上記講師の皆様、北海道立総合研究機構 大橋 義徳氏、森林総合研究所 久保山裕史氏

### 【ポイント】

- ・ 製材、集成材、プレカットを統合運営することにより、横持コスト減、歩留まり増加、規格外品の使い込みによりトータルでロス削減ができる。また、様々な製品を販売する営業力が非常に重要。
- ・ 輸送資材の工場で建築材を製造することは簡単ではないが、他工場との連携、輸送資材と建築材を組み合わせた木取りによって、顧客満足と自社利益を増加させることが可能。
- ・ プレカット工場における道産材使用比率を上げるため、複数の製材工場から未乾燥の製材を購入し、乾燥、仕上げを行う取り組みを実施。道産材比率は直近2年間で13%から19%に上昇。
- ・ 道産ツーバイフォー材は、北米産よりも価格は高いが、品質が良く、パネル製造歩留まりが高いため、1棟あたりのコスト負担は小さい。安定供給可能な道産材を使い続けるメリットは大きい。
- ・ 素材生産量は2017年以降頭打ち。ウッドショック下における国有林の増産率は1割に留まった。供給量増加に向けた量的拡大戦略(機械化、団地化)とともに、再造林の担保が必要不可欠。